

温室の花

今井一隆

ケンジ (29) 駆けだしの小説家
美恵子 (34) ケンジの姉
ユタカ (22/26) ケンジの弟
克彦 (59) ケンジの父
木村 (34) 美恵子の同級生
佐知子 (18/22) ケンジたちの母の教え子
聡美 (29) ケンジの恋人。医師
西田 (21) 新人看護婦
片山 (45) 婦長

暗闇の中、くぐもった人々の歓声、ブラスバンドの演奏。

明かりがつくと、そこは古びた病室である。

ベッド脇には小さな台とテーブルが置かれ、頭の上になる部分に作り付けの棚。壁にスチームストーブ。

人々の歓声とブラスバンドは隣室のテレビから漏れ聞こえてくるスポーツの中継らしい。スキー、あるいは、スケート、いずれにしても冬のスポーツ。

ケンジ、丸椅子に座り、背中を壁にもたせ掛け、雑誌を読んでいる。分厚い文芸雑誌である。そわそわと落ち着かない。それは隣室からのテレビの音のせいなのか。舌打ちし、雑誌を置いて立ち上がり、窓の外に視線をやる。

扉をノックする音。

荷物を持った弟のユタカ、バッグを下げた姉の美恵子が入ってくる。

ユタカ あれっ!?

美恵子 あ、ケンジ!

ユタカ なんだ、兄貴来てたの。

ケンジ ああ。

美恵子 いつ(来たの)?

ケンジ (動揺し) いや……。

美恵子 ?

ケンジ 今朝だよ。今朝、一番の飛行機で。

美恵子 そう。留守電聞いてくれたか心配だったのよ。

ケンジ ゆうべ、遅い時間に聞いたもんだからさ。直接、ここ来た方が早いと思って。

美恵子 すぐ、わかった？

ケンジ 何？

美恵子 ここ。結構、道、入り組んでるから。

ケンジ 空港からタクシーだから。

美恵子 そう。……ごめんね。せっかくのお休みに、急にこんなことになっちゃって。

ケンジ 姉さんが謝ることじゃないよ。

ユタカ (部屋を見渡し) へえ、一人部屋なんだ。(空のベッドを一瞥し)……で、お袋は？

ケンジ さあな。

ユタカ え？

ケンジ 俺が来たときにはもういなかったよ。

美恵子 朝から検査なのよ。

ユタカ ふうん、病人もいろいろ忙しいんだ。

ユタカ、窓を開ける。

ユタカ けど随分見晴らしいんだね。春になったら花見できるね。夏は花火もよく見えるだろうな。

ケンジ いつまで入院させとくつもりだよ。

ユタカ や……。 (苦笑い)

ケンジ おいユタカ、窓、開けんなよ。

ユタカ ん？

ケンジ 暖房逃げんだろ。

ユタカ 換気だよ、換気。

ケンジ ……。

ユタカ でも、こんだけ眺めがいいと部屋代、高いんじゃない？

ケンジ バーカ、観光地のホテルじゃあるまいし、眺めで値段が変わるかよ。

ユタカ そっか。 (笑う)

美恵子 それが変わるのよ。

ケンジ ・ユタカ え？

美恵子 廊下の向こうとこっちじゃ全然違うの。

ケンジ ほんとに？

美恵子 向こうはほら、最近、斎場ができたでしょ。火葬場と一緒にになった。窓

から煙突の煙が見えて、縁起が悪いつてみんな入りたがらないのよ。

ケンジ ああ……。

ユタカ じゃあ、それでお袋もこっちの部屋を？

美恵子 お母さんは、こだわらないって言うんだけど、でもそういう話聞いちゃうとやっぱりねえ……。

ケンジ 姉さん、縁起なんか担ぐんだ？

美恵子 そういうんじゃないけど……部屋代ケチつてると思われるの、嫌じゃない。

ユタカ 要するに、見栄っ張りなんだよ、姉貴は。

美恵子 そんなことないわよ。

ユタカ 見栄っ張りの美恵子。

美恵子 ユタカ！

ユタカ 後で俺に泣きついたって、知らないよ。

美恵子 誰が、あんたみたいなプーに……。

ユタカ プーとかいうなよ！

美恵子 だって、プーじゃない。

ケンジ おいユタカ。

ユタカ くん？

ケンジ いい加減、窓閉めろって。

ユタカ ……はいはい。(窓を閉め、ポケットから車のキーを取り出し)じゃあ、俺そろそろ行くわ。

ケンジ なんだ、もう帰るのか？

ユタカ まだバイトの途中なんだよ。

ケンジ ああ。

美恵子 (ユタカに) 夕飯は？

ユタカ いい。今晚ライブのリハーサルあるから、バンドの連中とどっかで食って帰る。

美恵子 そう。

ユタカ じゃあ、行くわ。兄貴、また。

ケンジ ああ。

ユタカ、出て行く。
いつのまにか、隣室のテレビの音は止んでいる。
しんとした部屋に、スチームストーブのカンカンという音。

ケンジ あいつ今、何やってんの？

美恵子 ？

ケンジ バイトって？

美恵子 お花屋さんの配達。通り道だからって、お店のトラックでここまで乗せ来てもらったの。

ケンジ ふうん。それで、あのバンドはまだ続けてるんだ。

美恵子 学生の頃とは随分メンバーも変わったみたいだし、さすがにもうプロになるとか、そういう夢み
たいなことは言わなくなったけどね。

ケンジ そう。

美恵子 でも週末になると、いまだにギター持って出掛けてくのよ。ほら、橋のこっちに喫茶店あったで
しょ。なんてったかなあ。ケンジ、行ったこと、ない？ 細い急な階段上がった二階の……。

ケンジ ああ、夜はバーになる？

美恵子 そう。その店でね、夜に演奏させてもらってるの。

ケンジ 姉さん、見に行ったことあるの？

美恵子 前に一度だけね。

ケンジ へえ。

美恵子 ステージが終わると……ま、ステージっていつでも、お店の隅っこに楽器がおいてあるだけなん
だけど……終わるとね、ユタカが帽子を持って客席を回んの。お客さん酔っ払ってるから、結構

なお金入れてくれるのよ。

ケンジ 相変らず好き勝手やってんだ。

美恵子 まあね。

ケンジ お袋、何も言わないの？

美恵子 今はね、もう。

ケンジ そっか。

やや間。

美恵子 ねえ、ケンジは？

ケンジ ？

美恵子 夕飯。家で食べるでしょ。

ケンジ ……いや。近くにホテルとってあるから。

美恵子 どうして？！ 家に泊まるんじゃないの？

ケンジ 仕事だよ。締切り近いから、こもってやらないと。

美恵子 そう。なら仕方ないけど……。

ケンジ ……。

美恵子 あんまり根つめすぎて、あんたまで入院なんてことにならないでよ。

ケンジ 平気だよ、俺は。

美恵子 ……。あ、そうだ。小説のこと、お父さんもすごく喜んだのよ。

ケンジ 親父が？

美恵子 うん。
ケンジ ……。
美恵子 でも本当のところ、やっぱりちよつとショックだったみたい。
ケンジ え？
美恵子 結構生々しいこと、いっぱい書いてあったし。
ケンジ ……。
美恵子 あんまり悪く書かないでもらいたいな。お父さんのこと。
ケンジ あんなの、全部フィクションだよ。
美恵子 それはそうなんだろうけど……。
ケンジ それより、何でまた？
美恵子 え？
ケンジ 姉さん、なんでまた親父なんかと会ってんの？
美恵子 ああ。……ここんところいろ、相談に乗ってもらってたのよ。
ケンジ いろいろって？
美恵子 ……。
ケンジ 康雄さんのこと？
美恵子 まあね。
ケンジ ……。
美恵子 ほら、男の人じゃないとわかんない事情って、あるじゃない。
ケンジ それで？
美恵子 え？

ケンジ あの人に相談して、うまい解決策でも見つかった？

美恵子 ……きっぱり、別れることにした。

ケンジ 別れるって？

美恵子 うん。

ケンジ じゃあ由美はどうするの？

美恵子 もちろん引き取るつもりよ。

ケンジ 金の話とかついたの？

美恵子 時間ばかりかかっても、あれだし。

ケンジ はあ？

美恵子 どっちみちあの人、慰謝料払えるようなあれじゃないし。

ケンジ そんなの、向こうの勝手な言い分だろ。一人で簡単に納得すんなよ。

美恵子 ……。

ケンジ 由美だって今度小学校に上がるわけだし、いろいろ金だつてかかるよ。

美恵子 お金のことなら、なんとかするわよ。

ケンジ なんとかって、具体的に、どうすんだよ。

美恵子 あんたが心配する話じゃないじゃない！

ケンジ 心配にもなるだろ！

美恵子 そりゃあ、私はケンジみたく、何か特別な才能があるわけじゃないけど……。

ケンジ そんなこと、言ってやしないよ。

美恵子 また仕事見つけるわよ。すぐに。

ケンジ ……。じゃあその間、由美の面倒は誰が見るのさ。幼稚園だって年中無休ってわけじゃないだろ？

美恵子 そのときは、お父さんが見てくれるって……。
ケンジ 正気かよ！ まさかあのこと、忘れたわけじゃないだろな？
美恵子 あのこと？
ケンジ 洋子が死んだあの夏のことだよ。
美恵子 ……。

ストーブのカンカンいう音。

しばらくして、誰かが扉をノックする。

紙袋を下げてユタカが戻ってくる。

ユタカ (重たそうに紙袋を持ち) これ、これ、これ。忘れ物。

美恵子 (振り返り) ……？

ユタカ (紙袋をドスンと床に置く)

ケンジ 何だよ、それ？

ユタカ 本だよ、本。書斎から適当に持ってくるようになって、お袋がさ。

ケンジ ああ……。

ユタカ あー、手え痛え。(ケンジに) 見て、ほら、真っ赤。(美恵子に) ライブ前なのに、ギター弾けなくなったらどうしてくれんだよ、ったく。

ケンジ んな馬鹿みたいに持ってくっからだろ。

ユタカ (急に顔を赤くし) 馬鹿って言うなよ馬鹿って！

美恵子 病人が、そんなに読めるわけじゃないじゃない。少しは頭つかいなさいよ。

ユタカ お袋、どれ読みたくなるかわかんないじゃん。

美恵子 ……。

ユタカ (二冊ずつ背表紙を見て) …… 坂口安吾に三島由紀夫、ボルヘス、吉本ばなな …… 結構守備範囲広いのな。しつかしまあ、お袋も定年も近いっていうのに、文学少女貫いちやつて …… 『万延元年のフットボール』だろ、『枯木灘』、『死霊』 ……。

ケンジ シレイ。

ユタカ は？

ケンジ 『死霊』^{しれい} って読むんだよ、それ。

ユタカ あ、そうなの。

ケンジ つか、お前そういう不気味なタイトルの本、病院に持って来んなよ。

ユタカ そこまでいちいち見てらんなかったんだよ。

扉をノックする音。

美恵子の同級生、木村が額の汗を手拭いで拭きながら入ってくる。

ユタカ あ、木村さん、どうも。

木村 おう。ユタカくん。

ユタカ 明日のライブ、見に来てくださいよ。今度はオリジナルやりますから。

木村 マジで？

ユタカ マジマジ。作詞作曲・五十嵐ユタカ。

木村　すごいじゃない。

ケンジ、窓を開ける。

ユタカ　何、窓開けてんの？　暖房逃げるだろ？

ケンジ　古本臭いんだよ。

木村　おう、やっぱりケンジ君だったか。

ケンジ　どうも……。

木村　ゆうべ、ホテルのロビーにいたでしょ？

ケンジ　えっ？

美恵子　ゆうべ？

木村　配達行ったら、見た顔がいるなど思ってたさ。声かけようかと思っただけど、女の人と一緒にだったから、人違いだったらやだなと思つて……。

ユタカ　人違いでしょ。

木村　え？

ユタカ　だって、兄貴、今朝、飛行機で……。　（ケンジに）だろ？

ケンジ　ああ……。

美恵子　……。

木村　なんだ、そっか。よかった、声かけなくて。ハハハ……。それはそうと、見せてもらったよ、新聞の記事。

ケンジ　え？

木村 むこうで大活躍らしいじゃないの。町じゅうの評判。
ケンジ そんな大袈裟な……。

木村 いやいやほんと。

ケンジ からかわないでくださいよ。

美恵子 お母さんがね、顔写真入りの新聞記事、拡大コピーして、回覧板に載せてもらったらしいのよ。
ケンジ ええっ？

木村 五十嵐先生とウチの親父、小学校からの同級生だったからね。頼まれちゃ嫌とは言えないって、ちよこつと町内会長の権力、利用したの。

ケンジ ……なんでそういう余計なことするかなあ……。

木村 あ、そうそう、これ。(と、果物の詰め合わせを) 親父から。

美恵子 わざわざどうも。

木村 本当は、親父が見舞いに来る筈だったんだけど、ぎっくり腰やっちゃって。

ケンジ ユタカ、お前仕事戻んなくていいのか？

ユタカ あ、そうだった。じゃあ木村さん、明日、絶対ですよ。

木村 おう、まかしとけ。

ユタカ、出て行く。

美恵子 (木村に)座って。

木村 うん。

美恵子 ウーロン茶しかないけど、飲む？

木村 おーう。
美恵子 ケンジは？
ケンジ 俺は、いいや。
美恵子 そう。
木村 でもなんだろうね、あの評論家。
ケンジ え？
木村 ほら、新聞に書いてたじゃない。「この十年で恋愛のパターンはすべて出尽くした感がある」：
：とか、なんとか。いかにも温室育ちの若造が、頭でっかちのコメント書きちやつてき。
ケンジ まあ、温室育ちの頭でっかちは、お互い様ですから。
美恵子 はい。（と、お茶を）
木村 あ、ありがと。……で、先生やっぱ、酒で？
美恵子 まだ、詳しく検査したわけじゃないから、アルコール性のものかどうか……。
ケンジ 典型的なアルコール性肝硬変の症状だよ。女のくせに、連続飲酒して、 血、吐いたんだろ？
美恵子 病気に女も男も、関係ないじゃない。
木村 やっぱり先生とこの配達、断わればよかったな。
美恵子 だって木村君は、仕事なもの。
木村 そりゃ、そうなんだけどさ。

間。

ケンジ (時計に目をやり) ……ちよつと俺、電話してくるわ。(出て行こうとして、振り返り) 公衆電話、どこにあったっけ?

木村 エレベーターの脇の、踊り場んどこ。
ケンジ ああ、どうも。

ケンジ、去る。

美恵子、本を棚にしまい始める。

木村 手伝おっか。

美恵子 ん?

木村 手伝う。

美恵子 ああ、ありがとう。

木村 しかしまだ随分持ってきたね。

美恵子 手元に置いておかないと、落ち着かないみたい。

木村 職業病なのかな。

美恵子 かもね。

木村 しかし先生、これ全部読むつもりなのかな? いつまで入院するつもりなんだろう。

扉をノックする音。

髪を三編みにし、眼鏡を掛けている制服姿の女子高生、佐知子が入ってくる。

佐知子 失礼します。

美恵子 はい。

佐知子 あの、五十嵐先生のお部屋は……。

美恵子 ……あ、母の生徒さんですか？

佐知子 はい。西高の、高田佐知子と申します。先生、急に入院されたって聞きました。

美恵子 わざわざどうも。

佐知子 あのう、名札、ごじゅうかぜ、になってますよ。

美恵子 は？

佐知子 (ドアの外を指し) 名札の字。五十嵐の「嵐」の「山」がなくて、五十嵐に……。

美恵子 ……。

美恵子、確認しに廊下に出る。

美恵子の声 あ……。

美恵子、戻る。

美恵子 ほんとだ。

佐知子 ええ。

美恵子 あ、どうぞ。

佐知子 はい。(中に入り)……今日はユタカさん、いらしてないんですか？

美恵子 え？ ああ、さつきまでいたんですけど……。

佐知子 そうですか。

美恵子 どうしてユタカのことを……？

佐知子 兄が、ユタカさんのバンドでドラムをやってるんです。

美恵子 ああ。

佐知子 実はお姉さんとも、前にライブのとき、一度楽屋でお会いしてるんですよ。覚えてらっしゃらない……ですよ？

美恵子 え？ あ、はいはい、あのときの……。

佐知子 思い出して頂けました？

美恵子 ええ……。

佐知子 (怪しい) ……。

美恵子 あ、どうぞ、座って。

佐知子 はい。で、先生のお加減いかがですか？

美恵子 今、ちよつと検査に行ってますけど……ご心配おかけしてごめんなさいね。

佐知子 あ！ ばなな。

美恵子・木村 ……？

佐知子 先生、吉本ばなな、読んでくれたんだあ。(本を手に取り)これ、休み明けの読書会で是非って、

私が先生に推薦したんです。

木村 ドクシヨカイ？

佐知子 私、文芸部の副部長やってるんです。

木村 ああ、そうなの。

そのときちようど、ケンジが戻って来る。

佐知子 (ケンジの顔を凝視して)……五十嵐ケンジ……。

ケンジ え？

佐知子 (鞆から一枚のコピーを取り出し)作家の五十嵐ケンジさん、じゃないですか？

ケンジ はあ。

佐知子 やつぱり、そうですね！ こないだの合評会するとき、これ、先生が文芸部員のみんなに……。

木村 (覗き込み)おう、これこれ、ケンジ君これだよ。回覧板に載せた新聞記

事。

ケンジ ……。

扉をノックする音。

婦長の片山と看護婦の西田が入ってくる。

片山 あら、随分賑やかだこと。

美恵子 あ、どうも……。

美恵子、礼をする。

つられるようにケンジも。

片山 ご家族の方ですか？

美恵子 はい。

佐知子 あ、いえ、私は……。

ケンジ 母が、お世話になってます。

片山 第二病棟の婦長をしております片山と申します。(看護婦を指して) 五十嵐さんを担当することになりました、西田です。

西田 西田と申します。どうぞ、よろしくお願いします。

ケンジ よろしくお願いします。

片山 (ベッドを見て)……。で、五十嵐さんは？

美恵子 え？ あの、母は朝から内視鏡検査だつて聞いてますけど。

片山 内視鏡？

美恵子 ええ。

片山 ……。西田さん？

西田 はい。

片山 どうなってるの？

西田 えつと(スケジュール帳を確認し)先生の学会の都合で、検査は夕方に変更になってます。

美恵子 え、そうなんですか？

片山 西田さん、ちゃんとご家族の方にお伝えしたの？

西田 旦那様には、昨日お伝えしてあるんですが……。

片山 どうして今朝、もう一度念を押しておかなかったの！

西田 す、すみません。

美恵子 あ、あの、多分トイレか何かですぐ戻ってくると思いますけど……。

片山 検査が済むまでは、看護婦の押す車椅子で移動してもらおう決まりになっております。
美恵子 はあ。

西田 お一人で出歩かれて、もしものことがあると困りますので。

木村 あの……五十嵐先生、そんなに悪いんでしょうか？

片山 まだ検査の結果を見てみないと、なんとも言えないんですけど、少なくとも入院時の数値が、G
OTが一三〇、 γ GTPが三〇〇以上ありましたから。

木村 はあ……。

片山 これ以上数値が悪化するようであれば、トイレもここでもらうことになります。

美恵子 ここで？

片山 はい。

美恵子 尿瓶……ってことですか？

片山 小はもちろん、大の方もです。

西田 ポータブル便器、いわゆる、オマルです。

佐知子 オマル？

西田 はい。

佐知子 オマルって、あの、赤ちゃんが使う、白鳥の……？

片山 大人用ですから。白鳥じゃありません。

佐知子 はあ。

片山 とにかく今は、安静が第一ですから。わたくし、自分で言っただんだん心配になってきました。
ちよつと五十嵐さん、探しに行ってきます。西田さん！

西田 はいっ。

片山 あとお任せして大丈夫ね？

西田 はい。任せて下さい！

片山、出て行く。

西田 あと、これも既に旦那様にはお伝えしてあるんですけど、しばらくの間、絶食していただくことになりましたので。

美恵子 ゼッシヨク？

西田 はい。お食事の方は一切できません。夕方の内視鏡検査が終わりましたら、お水かお茶程度は飲んで構わないそうです。あ、そういえば今日は湯呑み茶碗、用意していただけましたか？

美恵子 あ！（忘れてた）

西田 また備品の紙コップお貸しするのは構わないんですけど、抵抗あるんじゃないかと思うんですよ、尿検査で使ってる紙コップですから。

一同 ……。

西田 いえいえ、そりゃ、もちろん新品ですよ。でもこう、なんていうか、イメージ？ イメージがダブるんじゃないかと。色とか。

一同 ああ……。

西田 そんなことで患者さんが気分悪くされたりすると、あれですから。

木村 俺、まだ配達残ってるから、途中ちよっと、駅前寄って買ってくるわ。

美恵子 あ、うん。悪いけど。

木村、駆けて出て行く。

「廊下は走らない！」と片山の声。

佐知子（ひそひそと）……五十嵐先生、どっかでぶっ倒れてらっしゃるなんてこと、ないですよね？
ケンジ ……。

西田 それからですね。

美恵子 え？ まだ何かあるんですか？

西田 実はこの時間、検温と採血をする予定になってまして。

ケンジと美恵子、顔を見合わせる。

ケンジ 俺、そこら、ぐるっと見てくるわ。

美恵子 そうしてくれる？

ケンジ、出て行く。

西田 他にも今日は、CTスキャンと腹部エコーがありますから、あまりふらふら……っていうか、絶対、出歩かないように注意してください。

美恵子 わかりました。

西田 私、先に他の患者さんの検温済ませてきちやいます。最後、またきます。

美恵子 お手数おかけします。
西田 では。

西田、出て行く。

美恵子 (佐知子と目が合い)何か、慌ただしくてごめんなさいね。
佐知子 あ、いえ。

扉が開き、ドラッグストアの袋を抱えた初老の男性が入ってくる。
母の元夫、克彦である。

克彦 身の回りのこまごましたもん、一応、一通り買ってきたんだけど……。
佐知子 お邪魔してます。

克彦 え？

美恵子 お母さんの、生徒さん。

克彦 ああ。わざわざお見舞いに？

佐知子 はい。

克彦 それは、どうも。

美恵子 今、まだ、冬休み？

佐知子 はい。でも休みついても受験生ですから……あ！(時計を見て)いつけない。午後から補習授業だったんだ。……私、これで失礼します。

佐知子、慌ただしく出て行く。

克彦 ……えつと、齒磨き粉だろ、ティッシュペーパーの買い置きなんかはあつたんだよな。

美恵子 うん……。

克彦 あと(袋から取り出しながら)ウェットティッシュだろ、それと爪切りと、耳かき、缶切りは……いらなかったか。

美恵子 お父さん。

克彦 うん？

美恵子 ……。

克彦 何だ？

美恵子 由美のことなんだけどね……。

克彦 ああ。あれから、どうした？

美恵子 うん……。

克彦 そろそろ帰らないと。由美だって淋しがつてるだろうし。

美恵子 今晚、行くことになってる。

克彦 そうか。仲直りしたか。

美恵子 引き取りに行くのよ。由美のこと。

克彦 え？

美恵子 いろいろ考えたけど、やっぱり私……。

克彦 ……もう、そんなとこまで話が進んでるのか？

美恵子 ……うん。

克彦 そうか……。

克彦、再び荷物をしまい始める。

克彦 ……湯飲み。

美恵子 え？

克彦 昨日、お母さんの湯飲み茶碗がなかったらろう？

美恵子 ああ、うん。

克彦、古びた箱に入った湯飲み茶碗を一つ取り出す。

美恵子 ……それ……。

克彦 うちのアパートにあったんだ。たしか美恵子が中学の修学旅行でお土産に買ってきた……。

美恵子 お父さん、こんなの、まだ持ってたんだ……。

克彦、ベッド脇のテーブルに湯飲み茶碗を置き、作業を続ける。

溶暗。

明かりが入ると、書類を持った西田、その向かいに、美恵子と、克彦が所在なさげに立っている。

ケンジは一人離れて、壁に寄り掛かり、窓の外を眺めている。

西田 少しお熱が高いようでしたから、お薬、出してきました。

美恵子 はい。

西田 でも（と思い出し笑いする）……フッフ……。

美恵子？

西田 いや、だって、昨日まで、こおんな長い髪だったから。ばつさり切ったら印象、全然変わっちゃいましたよね。理容室から出て来たとき、最初婦長も五十嵐さんだって、わからなかったそうです。いろいろお騒がせしました。

西田 いえ。（咳払い。仕事の顔に戻り）検温と採血は、毎日決まった時間で　　すので、必ずお部屋にるように気をつけてあげてください。

克彦 はい。

西田 検査の方はとくに問題なく、予定どおりに進んでるようです。ただ、今朝申し上げました、内視鏡検査だけ、「夕方」から若干ずれ込むかもしれません。しかし、フッフ……。　　（思い出し笑い）

克彦 ……。

西田 いずれにしても、準備ができ次第お呼びしますので、それまでここでお待ちいただくよう、五十嵐さんに伝えてもらえますか？

克彦 わかりました。
西田 ではまた、後ほどかがいますので。

西田、会釈して、思い出し笑いしながら出て行く。
克彦と美恵子、椅子に腰掛ける。

克彦 お母さん、検温のことなんか、何も言っていなかったのにな。
美宙子 うん。

克彦 すっかり忘れちゃってたんだな。お母さんも、いい年だもんな。忘れっぽくもなるわな。

美恵子 そうね。

ケンジ ……。

美恵子 ……ケンジ、こっちきて座ったら？

ケンジ いい。

克彦 (独り言をつぶやくように) 最近、お父さんもそうだ。昔のことばかりが頭の底に染みついて、新しいことは外にぼろぼろこぼれ落ちていく感じがする。

美恵子 ……。

克彦 そうだ。ケンジにまだ、おめでどうも言っていなかったな。

ケンジ あ？

克彦 小説。読ませてもらったよ。

ケンジ ……。

克彦 まだ小さかったのに、あの頃のこと随分細かく憶えてるもんなんだな。

美恵子 違うのよ、お父さん。あれはね、フィクションなの。虚構。作り話よ。

克彦 作り話か……。とにかくお祝いしてやらなきゃな。来てるって知ってたら、何か買ってきたんだけど。

ケンジ (ぶっきらぼうに) いいよ、そんなの。

克彦 遠慮しなくていい。

ケンジ なんて俺が遠慮するんだよ!?

克彦 ……。そうだ。晩飯、ご馳走しよう。駅の南口にフランス料理の店できた。ちよつとしゃれた感じの。

美恵子 ああ。

克彦 ユタカと、由美も呼んで。

美恵子 ユタカは無理よ。

克彦 どうして?

美恵子 今日、バンドの練習だって言ってたし。

克彦 そうか。じゃあ、ケンジと美恵子と由美とお父さんと……四人か。

ケンジ お袋は?

克彦 え?

ケンジ お袋はどうすんだよ。絶食で点滴打たれてんだぞ。こんなときに、何がフランス料理だよ!

克彦 ……。

ケンジ そういうヤツだよ、昔から、親父は。

美恵子 ケンジ!

ケンジ ……。(再び窓の外に目をやる)

克彦 ……。

美恵子 ……いいよ。お父さん。行こう。

克彦 え？

美恵子 行こうよ、駅前のフランス料理。

克彦 ……ん、ああ……。

と、木村、音をたてて入ってくる。

木村 おーう、遅くなってごめん。（克彦に）あ、どうも。ご無沙汰してます。

克彦 どうも。

木村 いやあ、何かバイクの事故あったみたいでさあ、道、混みまくってて、やっと駅前に着いたと思

ったら、商店街、今日、定休日でやんの。結局、川向こうのデパートまで行ってたらこんな時間

に……。 （テーブルの上の湯飲みに気づき）あれ？

美恵子 あ、ごめん。湯飲み茶碗、お父さんが、用意してくれてたの。

木村 え？ ああ……そうなんだ……。

美恵子 いくらだった？（と言って財布を取り出す）

木村 あ、いいよ、いい。

美恵子 そんなわけにいかないよ。

木村 親父がさ、今度のバザーに出す物、探してたところから。ちょうどよかった。

美恵子 ……ほんとに？

木村 ほんと、ほんと。

美恵子 あ、じゃ、その代わりっていうんでもないけど、フランス料理、一緒にどう？
木村 フランス料理？
克彦 今晚、ケンジのお祝いで、みんなで食事に行くことになってね。
木村 ああ、そうなんですか。ぼくは、ぜんぜん、ていうか、喜んで。
美恵子 じゃあ、予約の電話してくる。
克彦 ああ、いい。父さんが行ってくる。

克彦、出て行く。

木村 そっかそっか、フランス料理。
ケンジ 何、言い出すんだよ？
木村 え？
ケンジ 姉さん、何考えてんだよ？
美恵子 よしなさい、人前で……。
ケンジ お袋のこと、ほっといて平気なの？
美恵子 べつに、ほっといてなんかないじゃない。
ケンジ だいたい俺が行かなくて、誰のお祝いすんだよ。
木村 え、ケンジくん、行かないの？
美恵子 わざわざ遠いとこ、お見舞いに来てくれてるんじゃない。
ケンジ その「遠いとこ」に、置き手紙一つで出て行ったのはどこの誰だよ！
美恵子 ……。

ケンジ 理想の共同社会つくる夢は、どうしたよ？ 今頃、のこのこ戻ってきてやがって、うかれて亭主面なんかしてさ。結局お袋のこと、便利に考えてんだ、あの人は。

美恵子 そんな言い方するんじゃないの。あんたに、何がわかるっていうのよ。

ケンジ じゃあ、姉さんは何がわかるっていうの？

美恵子 ……。

ケンジ 何が親父に相談だよ。何が男にしかわかんない事情だよ。結局姉さんは 自分の離婚を正当化するために、あの人の肩持つてるだけだろ。

美恵子 何よ、正当化って！

木村 まあまあ、二人とも……。

ケンジ 木村さん、黙ってて下さい。

木村 ……はい。

ケンジ (美恵子に) それともなに？ 姉さんもあの教祖様に洗脳されたか？

美恵子 止めてよ。いい加減にしなさいとぶつよ。

ケンジ ぶてよ。ろくに面倒も見れないくせに。ペットみたいに子供のこと引きとったりしてさ。勝手なんだよ、身勝手。子供にしたらしい迷惑だね。

美恵子 ……。

ケンジ あの人と何、相談してたんだよ。え？ 由美引きとって、洋子と同じ目に遭わせる相談でもしてたのかよ。

美恵子 もう止めて！

ケンジ ……。

ケンジ、黙って出て行くこうとする。

美恵子 どこ行くのよ。
ケンジ ……煙草だよ。

ケンジ、後ろ手にドアを閉め、出て行く。

美恵子 ……。(木村に)あ、ごめんね、なんだかみつともないとこ見せちゃって。

木村 あ、いや……。ケンジ君の言ったこと、あんまり気にしない方がいいと思うよ。

美恵子 (窓の外に目をやり)橋……。
木村 え？

美恵子 子供の頃、日曜日の朝にうちの両親喧嘩してね、「お父さんとお母さんのどっちを選ぶ？」なんて話になったことがあったの。そんなの、しよっちゅうだったから私はいちいち驚きもしなかったんだけど、ケンジがね、いつも槌りつくみたいに答えたのよ。「お母さん」で。だから私は、いつもお父さんの味方。なんだかお父さんが気の毒になっちゃって。

木村 ああ……。

美恵子 たいはいはそこで、喧嘩は終わるんだけど、その日はちよつと本格的だったみたいで、私たち二人して追い出されちゃったの。っていうか、お父さんが私を連れて家を飛び出したのね。車で町の中をぐるぐる走り回って、最後に行き着いたのがあの橋のたもと。結局お父さんには、どこも行くアテなんかなかったのよ。車の中で、近くの店が開くのを待って、私、朝ご飯のアンパンと牛乳を買いに行かされたの。女の子の私が、パジャマ姿のままだよ。店の人とか、ジョギングし

てる人とかにジロジロ見られて、もう顔から火が出るほど恥ずかしかった。同情なんかするんじゃないかって思ったわ。(笑う)

木村 (笑わず) そんなことがあったの……。

美恵子 ……でもね、お昼はいつもどおり、家でテレビ見ながら家族揃って、お母さんの作った焼きそばとか食べてたの。あの頃は私、「離婚」というものを、そういう小さな旅の繰り返しだと思ってた。

木村 ……。

美恵子 子供にしたらいい迷惑か。

木村 康雄からさ、だいたいの話は聞いたよ。

美恵子 ……そう。

木村 正直言って、驚いた。高校のときからだから、もう十五年の付き合いだろ？

美恵子 そうか。そうね。

木村 どうするの？ これから。仕事とかアテはあるの？

美恵子 フフ……。

木村 ？

美恵子 みんな同じこと聞くんだな。

木村 ……。もし、決まってるんだったらさ、ウチに来てくんないかな？

美恵子 え？

木村 あ、いや、ほら、ウチのお袋、もう年だし、帳簿の間違いかかひどくて、まいつちやってんだよね。ちょうど、事務員募集しようかって、親父と話してたところなんだ。OL時代、経理部だったんでしょ？

美恵子 まあ、そうだけど。

木村 簿記の資格なんかは？

美恵子 なんだか、もう面接されてるみたい。

木村 来てもらえると助かるんだけどな。

美恵子 ……うん。考えとく。

木村 うん。…あ、そうだ、久しぶりに泳ぎに行かない？ 十五年前の水泳部時代に戻ってさ。

美恵子 え？ だって…。(窓の外を見る)

木村 温水プールだよ。昨日ね、得意先で入場券もらったんだ。どう？ 由美ちゃんと三人で。いい気

分転換にもなると思うし。

美恵子 プール、か。

木村 夏にも、どこにも連れて行ってないんだろ？

美恵子 まあ。

木村 よし、じゃあ決まりだ。プール、プール。

窓の外に、雪が舞いはじめる。

美恵子 あ…。

木村 ？

美恵子 雪。

木村 え？ あれれ。本格的に降り出さないうちに、俺、残りの配達済ませてきちやうわ。

美恵子 うん。

木村、出て行く。

雪が強くなり始める。

美恵子、窓に寄り外を見ている。

カンカンとストーブの音。

ケンジが戻ってくる。

美恵子 ……随分早かったじゃない。

ケンジ ……煙草、忘れた。

ケンジ、テーブルの上の煙草を取る。

すると空である。空箱をくしゃくしゃに丸めて、ゴミ箱に捨てる。

沈黙のあと、ケンジと美恵子ほぼ同時に口を開く。

ケンジ ……姉さん、あの……。

美恵子 ケンジ……。

ケンジ さん？

美恵子 ……何？

ケンジ 何？

美恵子 いいよ。先に。

ケンジ いいよ。

美恵子 言いなさいよ。

ケンジ ……さっきのは、あれは、ちよつと言い過ぎた。

美恵子 ……。ううん……。

ケンジ ……そういえば今日、由美は？ 幼稚園？

美恵子 飯塚のおばちゃんのとこで、預かってもらってる。

ケンジ ああ。飯塚の……。

美恵子 私、雪、強くなる前に、由美、迎えに行ってくる。

ケンジ うん。

美恵子 お父さん、ここ戻ったら、家に電話くれるように伝えてくれるかな。

ケンジ ……。

美恵子 いい？

ケンジ ……ああ、わかったよ。

美恵子、出て行く。雪がさらに強くなる。

しばらくして、扉を開け、誰かが入ってきた。

ケンジ (振り向きながら、父に言う口調で) 姉さんが家に電話くれって……。

聡美 (こわ張った表情で) ……。

ケンジ 聡美……。

聡美、無理に微笑む。

ケンジ 休んでなくて平気なのか？

聡美 うん。

ケンジ ……。

聡美 まっすぐホテルに帰る気がしなくって。どうせだから、家族の方に挨拶だけでもしてこうかなって。

ケンジ そっか……。

聡美 迷惑だった？

ケンジ そんなことないけど。

聡美 ……。

ケンジ ま、座んなよ。

聡美 うん……。

ケンジ 飯は？

聡美 軽く、下の食堂で食べた。

ケンジ そう。何か飲む？ っていうっても、ウーロン茶くらいしかないんだけど。

聡美 もらう。

ケンジ、冷蔵庫のウーロン茶をコップに注ぐ。

ケンジ ……。(コップを渡す)

聡美 ありがとう。

ケンジ 休み、いつまでだっけ？

聡美 病院に届けを出しているのは明後日まで。月曜日は外来もあるし。

ケンジ 随分短いんだな。

聡美 冬休みなんて、どこも普通こんなもんよ。

ケンジ そうか。

聡美 そうよ。

ケンジ じゃあ、明日にはもう、帰らないと……。

聡美 うん。

ケンジ 俺は、ほら、お袋がこんなことになっちゃったから、一緒に帰るってわけにいかないけど。

聡美 わかってる。

ケンジ 大丈夫か？ 一人で。

聡美 大丈夫。

聡美、立ち上がり、窓の外を眺める。

聡美 強くなるのかな、雪。

ケンジ 風花だよ。

聡美 風花？

ケンジ 明日の飛行機には影響ないと思う。

聡美 (ぼつりと) ……どんどん強くなればいいのに。

ケンジ え？

聡美 どんどん強くなって、ずっと降り続いて、飛行機なんか飛べなくなればいいのに……。

聡美 (急におどけて) なんちゃって。……あたしみたいな優秀な女医が一人欠けたら、あの病院も困っちゃうもんね。

ケンジ ……そうだな。

聡美 笑ってよ。冗談なのに。

ケンジ、椅子に腰掛ける。

聡美 どうかした？

ケンジ ん？

聡美 顔色、あんまりよくないみたいよ。

ケンジ ……俺が？

聡美 ここんとこ、あんまり寝てなかったんじゃない？ 昨日も遅くまでキーボード叩く音がしてたし。

ケンジ うるさかったかな。

聡美 そうじゃないけど……ねえ、少し休んだ方がいいよ。

ケンジ 平気だよ、俺は。

聡美 思い切って気分転換した方が、かえって筆が進むってこともあるんじゃないかな。

ケンジ (溜め息をつき) ……気分転換どころじゃないだろ。

聡美 え？

ケンジ 年中休業みたいなもんじゃないか。

聡美 ……。

ケンジ ひとつ短編が文芸誌に掲載されたくらいでさ、過剰に期待なんかされても困っちゃうんだよなあ。

聡美 ケンジ……。

ケンジ 実際、ここんどこ、小説なんて一行も書けちゃいないし。こないだの編集者との打ち合わせってさ、あれ、嘘。

聡美 え？

ケンジ 本当は塾の講師やってる友達と会ってたんだ。添削指導の仕事、回してもらってる。

聡美 ……そうだったの。

ケンジ 中学生はたいしたもんだよ。答案用紙の升目に、決められた文字数ちゃんと埋めて、それなりに点数とってくもんな。俺なんか、いくら原稿書き直しても、そのままつ返されてばかりなのにさ。

聡美 しばらく全然別なこととしてみて、それから気分が乗ったとき、集中して書いてみればいいよ。

ケンジ 素人がわかったようなこと言うなよ！

聡美 ……ごめん。

ケンジ ……。そんな悠長に構えてられないよ。

聡美 焦ることないって。

ケンジ 生活するには金があるよ。

聡美 生活費なら、今までだって、私の収入だけでもなんとかなってたじゃない。

ケンジ いつまでも、そんなこと繰り返してるわけにいかないよ！

ストーブのカンカンいう音。

ケンジ ……とにかく今、そんな状況だからさ。悪いんだけど、しばらく待ってもらえないかな、金。
聡美 え？

ケンジ 夏までにはなんとか払えると思うから。

聡美 ……私、お金のことなんてあなたに頼んだ覚えはない。

ケンジ こういうのは普通、男が出すだろ。

聡美 普通？

ケンジ 一般的に、ってことだよ。

聡美 ……それが済んだら、もう関係なくなっちゃうのかな、私たち。

ケンジ ……。

風が、激しく窓を叩く。

と、克彦が花瓶を持って戻ってくる。

克彦 これ……。 (と、花瓶を)

ケンジ ……あ、遅かったじゃん。どこまで行ってたの？

克彦 この部屋殺風景だから、花でも飾ろうと思って、看護婦さんに言っ借りてきた。

ケンジ ああ……。そう……。あ、紹介するよ。大学の文芸サークルで一緒だった、倉橋さん。倉橋聡美さん。

聡美 はじめまして。倉橋です。

克彦 どうも。ケンジの父です。息子がいつもお世話になっております。

ケンジ ……。

克彦 今日は、わざわざお見舞いに？

聡美 え？ ああ……。

ケンジ 用事で、近くまで来たもんだから、そのついでだよ。

克彦 (聡美に)そうですか。

ポタツ、ポタツと水の滴る音。

克彦 (天井を見上げ)あ……。

ケンジ ……え、マジ？ ここ、雨漏りなんかすんのかよ。

聡美 (天井を見上げ) ……。

ケンジ 親父、ちよつと、それいい？

克彦 ん？

ケンジ 花瓶。

克彦 ああ……。

ケンジ、克彦から花瓶を取る。

雨水の落ちる場所を見定めながら、テーブル脇の床に置く。

水滴の音が碎ける音に変わった。

ケンジ ……とりあえず、このまま動かさないで。俺、看護婦のところに何とかするようにつてくる。

ケンジ、出て行く。
水滴の音が続いている。

克彦　こちらには、お仕事でいらしたんですか？

聡美　え？ ……ええ、まあ。

克彦　そうですか。大変ですね。 ……あ、何か飲みものでも……。

聡美　いえ。さつき、いただきましたから。

克彦　そうですか。

聡美　……。 (顔をじつと見て)

克彦　？

聡美　(くすりと笑う)

克彦　何か？

聡美　すいません。なんか、話に聞いていたのと、ずいぶん感じが違ったものですから。

克彦　ああ……。

聡美　あまり、ケンジくんと似てらっしゃいませんね。

克彦　え？

聡美　お父さん。

克彦　ああ。あいつは、母親の方に似たんですよ。ウチは次男も、長女も、そう。私に似たのは、下の娘だけでしたから。

聡美　……下の、娘さん？

克彦 洋子っていいます。

聡美 え……もしかして、ケンジ君の小説に出てくる「ヨウコ」って、実在の人物……？

克彦 お読みになったんですか？

聡美 あ、はい……。

克彦 あの小説の真ん中より少し後のあたりで、主人公の男の子が父親の家を訪ねるところ、あつたでし

よう。妹の誕生日に、ケーキを持って。男の子が玄関のドアを開くと、薄暗い部屋の奥でお風呂

場の扉が半分開いてて、近づいて見ると、湯気の向こうで妹が浴槽の中を覗き込んでいて……覚

えてらっしゃいます？

聡美 ええ……。

克彦 妹は爪先立ちで、何かを掴もうと腕を伸ばして……。

聡美 ……。

克彦 あの水音は、今でも私、忘れられません。そのとき、私、隣の部屋で、うとうとしていましたね。

身体じゅうの血の気がサーツと引いていきました。悪い夢を見ているのじゃないかと……夢であ

つてくれと願いながら、湯舟から洋子を引っ張り上げていた。そしてタイルの上に横たえて、服

を脱がせて、水道の蛇口をいっぱい捻って……。その一部始終を、ケンジは見ていたんですね。

いつの間にか、雪は小降りになっている。

聡美 ……なんだったんですか？

克彦 え？

聡美 洋子さんが掴もうとしたものって。

克彦 さあ。何だったんでしよう。

聡美 ……。

克彦 きつと「あぶく」じゃないですか。

聡美 あぶく？

克彦 タオルをお湯の中に沈めて、ぱっと手を放してやると、ゆらゆら「あぶく」が浮き上がってくる
でしょう？

聡美 ああ……。

克彦 どんなに上手く掴んでも、掌には何もなくて……そんな当たり前のことが、洋子には不思議でた
まらなかったらしいんです。お風呂で、私に何度も「あぶく」をせがんだものです。

聡美 あぶく……。

克彦 あ、いけない。もうこんな時間だ。洋子を風呂に入れてやらなくちゃ……。

聡美 え？

克彦、シャツのボタンを外し始める。

聡美 ……。

と、西田が駆け込んでくる。

西田 旦那さん、奥様が……。

克彦 ……。

西田 ナースステーションまで一緒にきてください！

三人のシルエットを残しつつ、溶暗。

翌日。雪はすっかり上がっている。隣室からテレビの音が聞こえる。

明かりがつくと、ユタカが椅子に腰掛け、ベッド脇のテーブルで何やらナンバリングなどの作業をしている。

すぐ脇に、制服姿の佐知子が立っている。

台の上に湯呑み茶碗。

花瓶には向日葵の花が活けられている。

ユタカ ……で、その食道静脈痛の手術で、昨日、お袋そのまんま手術室に直行だったらしいんだ。

佐知子 手術、ですか。

ユタカ うん。

佐知子 ショクドージャーミヤクリュー？

ユタカ 本来だったらね、血液が肝臓を通って心臓に戻るはずのところ、肝臓が硬くなってるもんだから、食道の方に迂回して、瘤みたくなるんだって。吐血したのは、それが破裂したらしい。ま、手術はうまくいったみたいだし、もう心配ないと思うけど。あ、いけね。番号打ち間違えた。

ユタカ、ぶつぶつ言いながらナンバリングを打ち直している。佐知子、鞆を置くとベッド脇の棚から一冊の本を取り出し、声に出して読みはじめ。

佐知子 「父さん！ 父さん！ どこへ行く？」

おお そう速く 歩かないで
話して 父さん

この小さなぼくに話して

でないと ぼくは迷児まいごになる

夜はくらく 父の影もなかった

幼な児は びっしり露に濡れた

ぬかるみは深く

幼な児は泣きに泣いた

いちめんいっめんに夜露が飛んだ」

ユタカ ……それ、何？

佐知子 「失われた少年」。ウィリヤム・ブレイクですよ。

ユタカ ふうん。(作業を再開する)

佐知子 有名な詩人ですよ。

ユタカ そうなの。

佐知子 ユタカさんも、曲がりなりにも作詞とかするんだから、少しは詩集とか読んだ方がいいですよ。

ユタカ 活字読むと頭痛くなっちゃうんだよ。

佐知子 ……。そういえば新しいボーカルの人、入ったんですよ。

ユタカ うん。

佐知子 女の人。

ユタカ おう。

佐知子 オーディション？

ユタカ ていうか、スカウトだな。

佐知子 へえ。どこで？

ユタカ カラオケ。

佐知子 ナンパじゃん。

ユタカ いいのいいの。

美恵子が、空の紙袋を下げて入ってくる。

佐知子 あ、洗濯、どうもすみませんでした。

美恵子 いえいえ、どうせついでだから。それよりお兄さん、怪我の方は大丈夫？

佐知子 脚の骨にひびが入っただけでたいしたことないそうです。

美恵子 たいしたことあるじゃない。

佐知子 兄は、残ったバイクのローンの方が心配みたいで。

美恵子 ああ。

ユタカ (ナンバリングを押し) はい、じゃあこれ、高田の分のチケットね。

佐知子 こんなにい！？

ユタカ このくらい学校で友達に捌けるでしょ？

佐知子 こんなには無理ですよ。

ユタカ 文句なら、自分の兄貴に言っつてよね。こっちは代わりのドラム探すだけでも、大変だったんだから。

佐知子 またの機会にしたらどうですか？

ユタカ は？ 初のオリジナル曲のお披露目なんだぜ？

佐知子 今日の夜なんて、どうせみんな、花火ですよ。

ユタカ あー、なんでこんな中途半端な時期に、花火なんかするかね。

美恵子 夏の花火大会、台風で中止になったでしょう。

ユタカ いや、それは知ってるけどさ……だいたい、今やったら、中止じゃないじゃん。延期じゃん。

美恵子 どっちでもいいけど。

ユタカ じゃあさ、その花火の客足を、なんとかこっちに向けさせてよ。

佐知子 どうやって？

ユタカ それは自分で考えようよ。

佐知子 花火はじまったら、演奏ほとんど聞こえなくなるし。

ユタカ いいんだよ。うちのバンドは演奏なんてハナから問題にしてないから。

佐知子 やってて、虚しくありません？

ユタカ 冗談だよ。真顔で言うなよ。とにかく、客足をこっちに向けさせるの。手段を選ばず。折ってでも。

佐知子 残酷。

ユタカ え？ (美恵子に) これ、(と、詩集を)お借りしてもいいですか？

佐知子 学校の図書館、詩集あんまり置いてなくて。

美恵子 ああ。

ユタカ いいんじゃない。お袋、しばらく読書どころじゃないだろうし。あ、じゃあついでにこれ(と果物の詰め合わせを)、あいつんとこ持ってってよ。絶食だからさ、お袋。

佐知子 ああ。じゃ、遠慮なく。

ユタカ 後でまた顔出すからって、あいつに言っといて。
佐知子 はい。

ユタカ あと、くれぐれもチケット、よろしくね。

佐知子 ……はいはい。(美恵子に) じゃ。

美恵子 お大事に。

佐知子、果物と洗濯物の袋を持って出て行く。

ユタカ ところで姉さんって、何年生まれだっけ？

美恵子 何よ、薮から棒に。

ユタカ 書類に書く欄があるんだよ。

美恵子 書類って？

ユタカ 姉さんが洗濯行ってる間に、看護婦が持ってきたんだよ。輸血するのに家族の承諾がいるんだって。

美恵子 承諾ってたって、もう昨日の手術の時点で、輸血しちやってるじゃない。

ユタカ そうなんだけど、事務的な続きで必要なんだってさ。後になって、揉めたりしないようにじゃない？ 宗教上のこととか、ほら、何かそんなような事件、あったじゃん。

美恵子 ああ、なるほどね。

ユタカ で、何年生まれ？

美恵子 昭和三十……。

ユタカ えっ！

美恵子 何？

ユタカ もう「四」まで書いてしまった。

美恵子 ……。いいわよ。自分で書くから！（と書類を奪う）

ユタカ 怒るなよ。

美恵子 べつに怒ってなんかいいわよ。あんたの字、汚いんだもの。

ユタカ ……。でもさ、こうして改めて考えてみると、親父って、うちの家族じゃないんだよな。

美恵子 （書く手を一瞬止め）……余計なこと、言わなくていいの。字、間違えちゃったじゃないの。

克彦が入ってくる。昨日のままの服装である。

美恵子 あ、（立ち上がり、なんとなく書類を後ろに隠すように）お母さんの様子、どうだった？

克彦 もう大丈夫みたいだ。すっかり落ち着いて、ぐうぐうイビキかいて眠ってる。

美恵子 そう。昨日、ケンジから電話もらったときは、どうなることかと思っただけ。

克彦 木村さんに、悪いことしちゃったな。

美恵子 え？

克彦 フランス料理。こっちから誘っというて。

美恵子 ああ。そんなの、事情が事情なもの。仕方ないわよ。

ユタカ 何？ 木村さんが、どうかしたの？

美恵子 なんでもないの。

ユタカ ……ま、いつけど。（克彦に）それより昨日、お袋、どんなふうにも暴れたの？

克彦 暴れたっていつても、非常口から、ふらふら雪の中を出て行ったところを、看護婦さんに取り押さ

えられて、ベッドにベルトで括りつけられて、手足をばたばたさせてただけなんだけど。

ユタカ 集中治療室のお袋、標本の昆虫みたいになってたもんな。

美恵子 でもそれだけにしちゃあ、パジャマについた血が、すごくなかった？

克彦 手術の後、しばらくして目を覚したら、お母さん、点滴の針を自分で引き抜いちやったんだよ。

美恵子 ええ？

ユタカ なんなの？ それ。

克彦 麻酔も抜け切ってなかったし、言ってること支離滅裂なんだけど、どうもね、トイレに行こうとしてみたみたいなんだ。

ユタカ だって、尿瓶なんだろう？

克彦 それが、部屋でするのすごくいやがってな。

ユタカ なんだ、それ。親父が来るようになって色気づいたか。

美恵子 うるさいよ、あんたは！

ユタカ ……。

美恵子 大丈夫なのかな、お母さん。

克彦 とりたてて心配することじゃないらしい。先生が言うには、手術後にはあんなふうにはわけわかんなくなることも、そんな珍しいケースじゃないんだそうだ。

ユタカ でも考えようによっては、よかったんじゃない。

美恵子 何が？

ユタカ あんなふうにはりつけにされてれば、さすがのお袋も安静にしてるしかないだろうしき。

美恵子 あんた、いつからそういう薄情なこと言う人間になったの？

ユタカ 現実を前向きにとらえてんの。

美恵子 馬鹿のくせに。

ユタカ 馬鹿って言うなって！

克彦 (花瓶の花に目をやり)……花、飾ってくれたのか。

美恵子 え？

克彦 (花に近寄り)こんな時期に咲くのか。向日葵。

ユタカ 温室の花だもん。今どき、そんなの、一年じゅう咲くよ。

美恵子 ちよつと待ってよ……。これって、お父さんが飾ってくれたんじゃないの？

克彦 俺が？

美恵子 だって、今朝、私たちがここに来たときには、もうそこに飾ってあったじゃない。

克彦 そうだったか？

美恵子 そうよ。(ユタカに)ねえ。

ユタカ ああ。そうだったかな……。

克彦 言われるまで、全然気がつかなかった。

美恵子 やだ、お父さん、自分で飾ったことも忘れちゃったの？

克彦 ……。

克彦、花の匂いを嗅ぐ。

美恵子 ……。ユタカ……。

ユタカ いや、俺が飾ったんじゃないよ。

美恵子 そんなことわかってるわよ！ あんた、今日、ケンジ見かけた？

ユタカ いや。

美恵子 ねえ、お父さんは？

克彦 ん？

美恵子 ケンジ、どこに行ったか知らない？

克彦 ああ。そういえば、今日はまだ、見てないな。

美恵子 (花を見て)……。

ストーブのカンカンいう音。

遠く上空をジェット機が過ぎる。

美恵子、窓の外に目をやる。

ドアをノックして、片山と西田が入ってくる。

片山 失礼します。

西田 おはようございます。

克彦 あ、おはようございます。

片山 昨夜は、大変だったみたいですね。

克彦 いろいろ、お手数おかけしました。

片山 いえいえ。大事に至らなくて、何よりでした。もう心配いらなと思いますけど、目が覚めるま

で、このまま向こうの部屋で様子を見ることにしましょう。

克彦 はい。

片山 さて、と。その間に、私たちはこっちの方をなんとかしちやわないとね。

美恵子・ユタカ(顔を見合わせ)……？

片山 (天井を見上げながら)西田さん。どのあたりかしら？

西田 はい。(指で中空に円を描くように) ちょうどそのあたりです。

片山 そのあたりって、どのあたりよ？

西田 (背伸びして)そこです。

片山 どこ？

西田 そこ。気持ち、うーっすら、アトになってる……。

片山 うーっすらって、(眼鏡を外して目を細め)……なってる？

西田 なってます。

片山 木目じゃないの？

西田 違います。わかりませんか？ 気持ちですけど。

片山 気持ち……。 (眼鏡を拭いて掛け直す)

西田 (靴を脱ぎ、精子の上に立ちながら)ほら、ここんところ。ここ……キヤツ！

西田、よろけて尻餅をつく。

その拍子に、誤ってベッド脇の湯呑み茶碗を床に落としてしまう。
音をたてて、茶碗が粉々に砕けた。

西田 あ！

克彦・美恵子 !

西田 す、す、すみません。(跪いて破片を拾おうとする)

片山 危ない！ 触らないで！
西田 はいっ。あっ……。(指を切ったようだ)
片山 ほら、言わないこっちゃんない。

片山、西田の指にてきばきと絆創膏を巻いてやる。

片山 ちゃんと靴履いて！
西田 はい……。 (靴を履く)
片山 そしたら、箒と塵取り！
西田 はい。

西田、走って出て行く。

片山 廊下は走らない！ ……ほんと、おつちよこちよいで……。ごめんなさいねえ。
克彦 ……。

克彦と美恵子、呆然と割れた湯飲みを見ている。

片山 ……あの、もしかして、とっても大事なものでした？
美恵子 ……。
克彦 ……。

片山 ……。
克彦 あ、いや、べつに、気になさらないでください。
片山 (ほっと溜め息をつき) ああ、よかった。……あ、失礼。これ、わたくしの方で責任もって、弁償させていただきますので。

西田、箒と塵取りを持って戻ってくる。

片山と二人、欠けた湯飲み茶碗をかたづけはじめる。
陶器の破片が、カチャカチャと乾いた音をたてて集められていく。
ストーブのカンカンという音。

西田 (深く頭を下げ) ほんとに、すみませんでした。

克彦 いいんですよ、もう。

片山 雨漏りの件は、今日のうちに業者の方に頼んでおきます。あと、代わりの湯飲みなんです、午後にも、新しいのを買ってお持ちします。

克彦 お願いします。

片山 色とか、何か、ご希望ありますか？

克彦 いえ。何でも。

片山 えっと、西田さん、あと何か、忘れてなかったかしら？

西田 輸血の承諾書、ですか？

片山 ああ、そう、それそれ。

美恵子 これ。(と、西田に書類を渡す)

西田 すみません。確かに、お預かりします。

片山 では……。

ユタカ あ、あのう。

片山 はい？

ユタカ 名札の字。ごじゅうかぜが……。

片山 ああ、速やかに直しておきましたよ。(西田に)直したわよね？

西田 はい。速やかに。

ユタカ いや、今度は、五千嵐ごせんあらしになってんですけど。

片山 えっ!？

片山、一旦廊下に出て確認し、

片山 ほんとだ……。西田さん、すぐに直して。

西田 は、はい。

西田、去る。

片山 重ね重ね失礼しました。

片山、去る。

ユタカ（冷蔵庫のウーロン茶をコップに注ぎ）湯飲みにも入ってなくてよかった。不幸中の幸いだっ
ね。

美恵子 何で、そう無駄にプラス思考なのよ。

ユタカ 無駄なことないだろ。

美恵子 ちよつと、ほら、こぼさないでよ、馬鹿。

ユタカ だから馬鹿って言うなって！

ケンジが入って来る。

美恵子 ケンジ！ どこ行ってたのよ。

ケンジ え？ どこって、ホテルだよ。今朝方帰って、今また来たところだけど。

美恵子 そうなの？

ケンジ うん。

美恵子 なんだ、もう、あんまり心配させないでよ。

ケンジ 何が？

美恵子 何がって……だって、あんた黙っていなくなっちゃうんだもの。

ケンジ 黙っていなくなってるよ。連絡先なら、帰る間に親父に渡してあるし。

美恵子 そうなの？（と、克彦を見る）

克彦 そうだよ。

美恵子 なに、それ。だったら、早く言ってよ！

克彦 ケンジに急ぎの用だったか？

美恵子 べつに、そういうわけじゃないけど。……あ！　　そういえばユタカ。今朝、バンドのなんとかさんて人から電話あったわよ。

ユタカ え？

美恵子 今日のライブのことで至急話したいことがあるからって。

ユタカ ちよつと、それこそ早く言ってよ！

美恵子 あんたがいつまでも寝てるからでしょ。

ユタカ つたく……。 (携帯電話を取り出す)

ケンジ おい、病院内は携帯禁止だろ。

ユタカ あ、そっか。

ケンジ エレベーターの脇の踊り場に、公衆電話あつから。

ユタカ ああ。じゃちよつと行ってくる。あ、(と、ポケットを探り)姉さん、テレカある？

美恵子 え？　　ああ。ちよつと待って。

ケンジ (取り出し)ほら。これ使え。

ユタカ サンキュー。これ飲んじゃっていいや。(と、ウーロン茶の入ったコップを渡す)

ユタカ、出て行く。

ケンジ まったく、こんなときにバンドだなんて、いい気なもんだよ、あいつは。

と、にわかには廊下が騒がしくなる。

幾人もの足音、ゴロゴロという車輪の音。

扉の閉まる音とともに、それらの音が消える。

克彦 お隣、亡くなったんだな。

美恵子・ケンジ ……。

克彦 あ、そうそう。花瓶の水、取り替えようと思ってたんだ。また忘れるところだった。

克彦、しかし、花瓶を持たずに出て行く。

ケンジ ……？

美恵子、空気を入れ替えるために窓を開ける。

風が吹き込みカーテンが揺れる。

美恵子 ……みんな黙っていなくなる。

ケンジ え？

美恵子 この季節になるとね……雪の中に太陽の匂いがすると、どうしてか、そんなふう思うことあるんだ。ついさつきまで当たり前前に思っていたものがみんな、急によそよそしく感じられて、それで私は不安になるの。眠り込んで目が覚めたときには、私一人が取り残されてる。……ケンジも、黙って帰っちゃったのかと思ったのよ。

ケンジ ……そんなわけないじゃんか。

美恵子 ……。木村君がね、今日、由美をプールに連れてってくれてるの。お店、お休みして。

ケンジ え？ この雪の中？

美恵子 温水プールよ。

ケンジ ああ。

美恵子 ほんとは、三人で行く約束だったんだけどね。

ケンジ ……そうなの。

ケンジ、ウーロン茶を飲み干す。

ケンジ 子供の頃さ、よく親父に連れて行かれたよな。あれ、市民プールだっけ。入場料が十円のやつ。

十円プール。

美恵子 廃校になった小学校のプールよ。

ケンジ スノコの廊下がぬるぬるして気持ち悪いんだよな。親父がさ、男のくせにカナヅチなんて恥だとか言ってるさ、俺、ずっとバタ足の練習ばつかやらされたんだよ。膝曲げるなどの、目つむるなどの、うるさくってるさ。

美恵子 うん。

ケンジ あのとさ、もう、姉さん二十五メートル泳げたんだよな。全然似てないよな、俺たち。きょうだいなのに。

美恵子 どっかしら似てるのよ。他人が見たら。

ケンジ そうなのかな。

美恵子 そうよ。さんざん言われたじゃない。二人ともお母さん似だつて。

ケンジ 今でもボロいままなのかな、あのプール。

美恵子 今は、べつの所に新しくできたのよ。

ケンジ じゃあ、あのおんポロは？

美恵子 取り壊されて、それで新しくあの火葬場と斎場が建ったの。

ケンジ なんだそつか。……あ、姉さん、スイミングスクールのインストラクターとかやったら？ せっかくインターハイにも出てるんだしさ。

美恵子 ……私、彼のお店で働くことになるかもしれないんだ。

ケンジ 彼って……？

美恵子 ……。

ケンジ え、もしかして木村さんの？

美恵子 手伝ってくれないかって言われてる。

ケンジ それって、……再婚するってこと？

美恵子 そうじゃないけど……でも、だとしたら、どう思う？

ケンジ どうって……。

美恵子 ……。

ケンジ いいんじゃないの。

美恵子 本当に、そう思う？

ケンジ 姉さんがいいと思うなら、それが一番だよ。

美恵子 ……。(壁時計を見て) あ、もうこんな時間。洗濯機回してたんだ。ちよつと見てくる。

ケンジ ああ。

美恵子 あ、それから、ケンジ。向日葵の花、どうもありがとうね。

ケンジ 花？

美恵子、出て行く。
一人、残されるケンジ。

ケンジ
……。

窓の外、聡美を乗せたジェット機の音。
ケンジ、花瓶に歩み寄る。
花びらに手を伸ばしたとき、ジェット機が上空を通過する。
暗転。

暗闇の中で花火の上がる音がする。最後を知らせるかのように立て続けに打ち上げられる。やがてしんと静まり返った中、窓に風鈴の音。遠くから秋の虫と牛蛙の鳴き声が聞こえてくる。

窓から月明かりが差し込む。

そこは社宅（アパート）の一室である。

床に、荷造りした段ボール箱がいくつも置かれている。その中には、ケースにしまわれたエレキギターも紛れている。

蓋の聞いた段ボール箱の傍らに小さなテーブル。

そこでは、ゆったりした服を着た佐知子が、うつ伏せで眠っている。

玄関で、ガチャガチャと鍵を聞ける音。

スーツ姿のユタカが、鞆を下げ入ってくる。

ユタカ ただいま。

佐知子 ……。

ユタカ なんだ、また寝ちゃってるのか。（鞆を置き）おい、おい。（肩を揺する）

佐知子 ……ん？ あ、お帰りなさい。

ユタカ 風邪引くぞ。

佐知子 ああ……。

ユタカ 花火、終わっちゃったな。

佐知子 (窓の外に目をやり) ああ、そうみたいね……。

ユタカ どうした?

佐知子 なんか、へんな夢、見た。

ユタカ 夢?

佐知子 うん。

ユタカ どんな?

佐知子 あなたが病気だか怪我だかで、病院に入院してるの。

ユタカ ほお。

佐知子 それで私がお見舞いに行くと、花瓶に花が飾ってあって、あなたはそれを見つめてて、私の来た

ことに気がつかないの。

ユタカ なんだ、それ。どういう意味?

佐知子 だから、夢よ。

ユタカ ふーん。

佐知子 晩ご飯は?

ユタカ 社員食堂で済ませてきた。(上着を脱ぎハンガーに掛ける)

佐知子 そう。(ユタカが衣服を脱ぐのを手伝う) 明日もまた遅いの?

ユタカ 来月決算だからね。まあ、社宅に入れば通勤時間も短くなるし、その分、今までより早く帰れる

ようになるよ。

佐知子 うん。

ユタカ 急に社宅も閉鎖だもんな。うちの会社も、いつまで持つやら。

佐知子 ヘンなこと言わないでよ。

ユタカ でも今日一日で、思ったより随分かたづいたじゃん。荷物、廊下のと合わせてこれで全部？

佐知子 まだ、あとちよつと。明日、お兄ちゃんも荷造り手伝いにきてくれるって。

ユタカ あいつ、来るって？

佐知子 うん。

ユタカ ま、あんまりアテにできないけどな。

佐知子 どうして？

ユタカ だってあいつ、肝心なときになると、いつつもないじゃん。

佐知子 昔とは違うわよ。

ユタカ だといいいけどね。どっちにしても、あんまり無理すんなよ。日曜日、俺もやるからさ。

佐知子 うん。

ユタカ あ……。

ユタカ、エレキギターを手に取る。アンプにつながず、弦をつま弾く。

ユタカ うわ。錆びてる……。

佐知子 昼間お義姉さんから電話あったわよ。

ユタカ ああ。木村さんのトラック、どうだった？

佐知子 午後から大丈夫だった。

ユタカ そう。

佐知子 どうせだからお店早く閉めて、二人で手伝いに行こうかって。

ユタカ トラックだけ借りられればいいんだよ。親父のこともあるんだし。

佐知子 私もそう言ったんだけど……。

ユタカ 何か言ってた？ 親父のこと。

佐知子 また最近、独り言が多くなったみたい。

ユタカ そっか……。

佐知子 でも、都合つけてくるって。

ユタカ 案外、気分転換なのかもな。ま、こっちは助かるからいいけど。

佐知子、ユタカの鞆を片づけようとする。

佐知子 ？

中を開けると、一冊の文芸誌。

ユタカ ……ああ、駅前の本屋でさ、珍しく兄貴の名前見つけたから。四年ぶりの新作だってさ。

佐知子 そう。

ユタカ 兄貴も結構、粘るな。

佐知子 相変わらず、連絡取れてないの？

ユタカ ああ。お袋の葬式以来。何度か電話したんだけどずっと留守電でさ。そのうちどこかに引越したみたいなんだけど、そのまま行方知れず。結局、俺らの結婚式にも顔出さなかったしな。

佐知子 何かあったのかな？

ユタカ さあ。

佐知子 誰か、知り合いの人とかいないの？

ユタカ そういえば前に一度、大学時代のサークルの友達とかっていう女の人から電話が掛かってきたことあったけど……。

佐知子 で？

ユタカ 兄貴、いないってわかったらすぐ切れた。

佐知子 そう……。ねえ、この雑誌の編集部に聞けば、お義兄さんの住所わかるんじゃない？

ユタカ くん？ ああ、でもまあ、元気でやってるんだろうから、わざわざいいだろ。あー、久しぶりに弾いたら、指、痛てえ。

佐知子 (本のあるページに目を留めて) あ。これ……。

ユタカ くん？ どうかした？

佐知子 この詩。

ユタカ (本を取り) 「父さん！ 父さん！ どこへ行く？

おお そう速く歩かないで

話して父さん この小さなぼくに話して

でないとぼくは迷児になる」

……どっかで聞いたことあるな。兄貴、煮詰まっとうとう盗作でもしたか？

佐知子 こういふのは引用っていうのよ。

ユタカ そうなの。

佐知子 そうよ。

ユタカ 誰の詩だっけ？

佐知子 ブレイク。お義母さんが持ってた本にあった詩よ。

ユタカ ああ、そうだった。兄貴も読んでたんだな。

佐知子 そうね。

ユタカ マザコンだしな、兄貴。

佐知子 あなたはどうなのよ？

ユタカ ……さあ、どうなのかねえ。

二人、しばらく同じページに目を落とす。

と、窓の外、連続する花火の音。

驚いて顔を見合わせ、そちらを見る二人。

ユタカ まだ、終わってなかったんだ。

佐知子 仕掛け花火。

二人、窓辺に立つ。

佐知子 ここからじゃ見えないわね。

ユタカ ああ。見えないな、何も、ここからじゃ。

花火の音を残し、溶暗。

完全な闇の中。〈幕〉

第24回文化庁舞台芸術創作奨励賞佳作受賞作品

文中、ブレイクの「失われた少年（無心）」は寿岳文章訳（世界の詩55『ブレイク詩集』弥生書房）から引用しました。